

製品名: PRC1(リン酸化 Thr481)ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab06057**

研究使用のみ

概要

| | |
|--------|--|
| 説明 | ウサギポリクローナル抗体 |
| 宿主 | うさぎ |
| 応用 | WB,IHC |
| 反応性 | ヒト、ラット、マウス |
| 標識 | 非共役 |
| 修飾 | リン酸化 |
| アイソタイプ | IgG |
| クローン性 | ポリクローナル |
| 形態 | 液体 |
| 濃度 | 1mg/ml |
| 保存 | アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。 |
| 輸送 | 氷袋 |
| バッファー | 50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。 |
| 精製 | アフィニティー精製 |

応用

| | |
|------|--------------------------------|
| 希釈倍率 | WB 1:500-1:2000,IHC 1:50-1:300 |
| 分子量 | 72kDa |

抗原情報

| | |
|--------------|------------------------------------|
| 遺伝子名 | PRC1 |
| 別名 | Protein regulator of cytokinesis 1 |
| 遺伝子 ID | 9055.0 |
| SwissProt ID | O43663 |
| 免疫原 | AA 範囲: 481 のヒトタンパク質からの合成リン酸化ペプチド |

背景

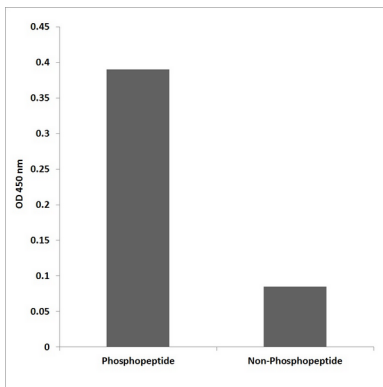
この遺伝子は細胞質分裂に関与するタンパク質をコードしています。このタンパク質は、有糸分裂の S 期および G2/M 期に高濃度で存在しますが、細胞が有糸分裂を終え G1 期に入ると、そのレベルは劇的に低下します。間期には核内に局在し、有糸分裂中には非常

に動的な方法で有糸分裂紡錘体と会合し、細胞質分裂中には細胞中央部に局在します。このタンパク質は、いくつかのサイクリン依存性キナーゼ (CDK) の基質であることが示されています。平行微小管の極性化と、収縮環の組み立てに関与する因子の濃縮に不可欠です。選択的スプライシングにより、複数の転写バリエーションが生じます。[RefSeq 提供、2012年6月]、機能: KIF4A は、中期から後期への移行期に、PRC1 を紡錘体の微小管のプラス端へ転座させます。これは、組織化された中央紡錘体中央部と中央部の形成、そして細胞質分裂の成功に不可欠なステップです。KIF14 が中央紡錘体および中央体へ局在するために必要。in vivo および vitro の両方で微小管結合および束形成タンパク質として機能する。in vivo ではサイクリン-CDK 基質として機能する可能性がある。PTM: リン酸化されるが、G1/S 期細胞では非常に弱い。細胞周期後期にはより高いレベルのリン酸化が検出され、有糸分裂中に最大に達する。類似性: MAP65/ASE1 ファミリーに属する。細胞内局在: 間期細胞の核に主に局在する。有糸分裂中は有糸分裂紡錘体の極に関連し、細胞質分裂中は細胞中央体に局在する。サブユニット: C 末端 Rho-GAP ドメインおよび RACGAP1 の塩基領域と相互作用する。in vitro では、RACGAP1 との相互作用により Cdc42 に対する GAP 活性が阻害され、これが正常な紡錘体形態の維持に必要であると考えられる。有糸分裂後期には、N 末端領域を介して CENPE、KIF4A、KIF23 の C 末端と個別に相互作用する。KIF14 および KIF20A とも相互作用する。

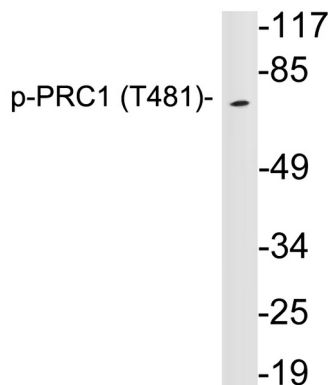
研究分野

細胞生物学

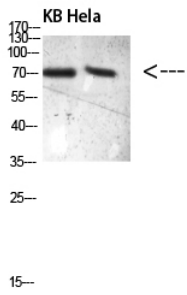
画像データ



PRC1 (リン酸化 Thr481) 抗体を用いたリン酸化ペプチド (リン酸化左) および非リン酸化ペプチド (リン酸化右) 免疫原の酵素結合免疫吸着測定法 (リン酸化 ELISA)



p-PRC1 (Phospho-Thr481) 抗体を用いた HeLa 細胞溶解液のウエスタンブロット解析。



293T VEC 溶解液のウェスタンブロット分析、抗体は 500 倍希釈。二次抗体は 1:20000 倍希釈。